風景デザインレター from 九州（第 50 号）

東日本大震災から、まる 3 年が経過しましたが、復興は思うに進まず、地元からのいら立ちの声が聞こえてきています。復興が思うに進まない原因の一つに、原状復帰ではなく、新たな環境の創造というものがコンセプトにあるのではないかと思われます。新たな環境の創造とは、いったいどのような環境を言うのか、それが不明だから進まない、そんな気がしています。

今年 2014 年の新書大賞第 1 位に輝いた「里山資本主義」。自分が探していた幸福な生き方の方向性と共通な視点が、記載されています。その共通性とは。

【風景から地域支援へ、その共通点】

平成 18 年から取り組んでいた「風景デザイン研究会」。この風景デザインレターの第 8 号でも紹介しましたが、シビックデザインを発端とする公共デザインの在り方から、場のデザイン、さらにはより広範囲な風景のデザインまで議論の対象としてきました。この「風景デザイン研究会」も会を進めるごとに、景観から、地域の在り方に関するテーマが中心になるようになってきました。

一方で、応用生態工学会でも同じような話を聞いた記憶があります。つまり、里山保全のテーマを中心に、人間社会と生物の生息場の在り方に関する議論は、生物の環境の在り方から、しだいに、地域の在り方に関する議論に興味が向かうようになったと。

その後、「風景デザイン研究会」から足を洗い、ほぼ同じメンバーで立ち上げた「九州郷づくり共助ネットワーク研究会（略称：共助研）」は、まさしく地域の在り方の議論を行う場となりました。

環境から、景観へ、風景へ、そして、地域づくりへの、この流れは、自分の中では自然に移ってきたテーマであると思っていましたが、その基幹にある共通のテーマが、この「里山資本主義」で明らかになったかと思われます。

それは、日本人が持っている価値観の転換を目指しているのではないか、あるいは、いままで目指してきたことをもう一度原点に立ち返って見つめなおす必要があるのではないかということでした。

当然、地域の姿は、そこの風景として現れるのですが、その地域の姿の中に、人々が生きていく喜び、あるいは幸福感が見て取れることでもあり、その幸福感は、日本人共通のものでないだろうかと思われます。

以前のこの風景デザインレターにも書いたことがありましたが、多少高い給料をもらっても、毎日食べているのがコンビニ弁当である都会の生活と、確かに実入りは少ないものの毎日季節感あふれるおいしい食事が食べられる地方の生活と、どちらが、求められるべき生活であるのか。いや、どちらに価値があるのかという二者選択を迫るのでなく、今まで一方的に都会の生活が魅力が高く、地方（田舎）の生活は魅力がないとの評価ではないどちらの生活空間にも質は異なるが同じ魅力のある空間であるという価値観が生まれることが、本来の姿ではないかと思われるのです。そのような価値観の二面性は、いままで高く評価されなかった地方（田舎）の生活を再評価することから生まれてくるのではということです。

これまでの地域づくりの基本は、地域活性化であり、定住人口の増を目標としたものでした。その基本は、少しでも都会的な要素が地方にも生まれることを期待してのことだと考えられます。しかし、もはや日本の人口減少が必然となり、当然、地方の人口増が見込めない状況になった今日、自分の地方だけ人口増を目指しても、これは人の取り合いの競争を行うことにはなっても、日本全体の国土の健全性は保たれることはないのではないかと危惧されます。（地方同士で、この競争を認めてもいいとの議論もありますが）

そうではなく、地方の魅力(これはおそらくどこの地方にも共通する魅力)を再評価、再認識し、人々の人生の選択肢のなかに、地方での生活の姿をしっかりと定着することではないかと思われます。

先日、共助研活動の一環で、大分県豊後大野市の長谷地区という美しい地方（田舎）で活動を行った際の飲み会で、議論になったことがありました。5 年近くこの地域で活動を行ってきました。地域の魅力の発見を地域の方々（中学生などの若い人も含め）と議論し、その成果として、地域の人たちが自分たちの地域に自信が出てきたという話や、市が一番元気のある地域であると認めるぐらい地域の活動が活発になってきた現実があり、これまでの活動にはそれなりの成果があったと話したところ、会員の一人から、しかし、これまでの活動で、地域の特産品が売れ出したということもなく、新しい産業が芽生えてきたということも

なく、実際の経済的な向上は全く生まれていないのを見れば、成果が出ていないとみるべきであるという意見でした。結構、成果の在りなしで喧々諤々の議論（飲みながらの意見ですので少々乱暴な展開だったのですが）となりました。

成果がないとの意見を出したメンバーは、もと商店街で活躍し、その後地域通貨等を普及するコンサルタントとして日本国中を走り回っている方です。一方、それなりの成果があったとするのは、土木コンサルタントチームのメンバー。話の中でも、土木の人は、ものを考える時間スパンが長く、5 年、10 年レベルで考えるが、商いをやっている人間は、明日には成果を出さないといけないという違いがあるかもという、お互いの立場の違いに関する話題も出ましたが、結局、5 年間の成果としての評価は、真っ二つに分かれました。

この話を、少し頭を冷やして考えてみました。建設コンサルタントチームは、地域の魅力を再確認する行為は、大きくとらえれば日本人の価値観の転換を目指しているではなかろうかということ、これに対し、その地域の経済の活性化を目的としているということでした。というか、そういうことでなかったかと思われます。

この美しく豊かな日本の国土の中で生きていくのであれば、もっと、その美しさや豊かさを享受できるような生き方をすべきで、その基本は、経済中心で機能してきた都会の中ではなく、地方の生活にあると考えられます。

ただ、わかっていても、なかなか地方では住めないという現実もあります。私自身も、親の介護や家族のことを考えると、今すぐ、都会生活を捨てて、地方(田舎)へ飛び込むことはできそうにありません。しかし、地方の生活の豊かさは、この 5 年間の活動を経て実感としてわかってきました。なんと、地域の人が生き生きとして元気であるか。確かに、地方には、人間関係やいろいろな不便なことがあり、多くの地方の悩みを抱えているのかもしれませんが、食べる、住むという人間が生きていく基本的なところの豊かさは、地方に軍配があることは間違いないようです。

多少不便でも、安全、安心が確保されていれば、こんないいところはないと地元の人はいいます。治水事業が着実に行われ昔のように洪水の被害にあわなくなった、道路も広く快適になった、病気になってもいざというときは救急ヘリが来てくれるなどなど。

さて、ここでふと湧いた疑問。都会で稼いだ金持ちが、地元の食と自然豊かな環境だけを手に入れることを目的に、地方（田舎）に自宅を立て始めたらどうなるか。地方に、お金持ちの広大な御殿と、元から生活する人々との 2 つの生活層が生じる可能性があるかも。この「里山資本主義」の社会が成立するためには、このような地方の 2 極化を防がなければいけないのかもしれません。ただ、この IT ネットワークが発達した社会では、あえて都会で生活する必要もなく、地方に生活拠点を移す人が増えてくるはずです。あるいは、農業の企業化が進めば、農業会社に所属することで、地方に住むことを余儀なくされる人も増えるかもしれません。その時に何がおこるか。再び、地方の都市化なのか。地方を否定し、都市の価値観を地方に持ち込めばそうなるでしょう。しかし、地方の価値観を理解・認識していれば、そのような行為もある程度制限されるのではないでしょうか。要は、地方の価値を日本人全員が再認識し、共有化することです。そのことで、都会自体の中にも、地方の価値が投影されるようになることで、さらに、都市の魅力が増していくこともあるのではと思われます。

現在は、都会においても都市緑地が、幾分かの地方の価値を投影していますが、そこに、地方の風景の投影が生まれれば、本当に、地方の価値が認定されたと考えられることができるかと思います。

東日本大震災が起きて丸 3 年がたった今日、東北の風景をどのように再生するのか。

この議論の中に、安全、安心とともに、この地方の価値を映しこんだ地域づくりが行われることをきたしています。あわせて、5 年間の共助研の活動が、このための小さな一助になればとも思います。

【3 年越しの最終回となりました。失礼しました！！】